

NPO リトル・クリエイターズ 報告書



ダイアログ・ダイバーシティミュージアム「対話の森」

対話の森こども 5000 人たいけん！プロジェクト

NPO リトル・クリエイターズでは、児童養護施設の子どもに様々な体験を通してその視野を広げ、知らなかった世界を自分のものとし、自身の可能性を信じて努力を重ねてほしいと考えています。これまでも、観劇会を開催したり世界の大使館を訪ねたり、少しずつ活動をして参りました。

2022年の夏休みには、東京・竹芝にあるダイアログ・ダイバーシティミュージアム「対話の森」を訪ねました。「対話の森」では目が見えないことがどういうことか、耳が聞こえないことがどういうことかを、実際に体験して対話を通じて学び、感じるすることができます。その他にも、ダイバシティとは何かを体験できるプログラムがたくさん組まれていますが (<https://taiwanomori.dialogue.or.jp/>)、クラウドファンディングで支援を受けて特に子どもたちを対象に企画された『対話の森こども 5000 人たいけん！プロジェクト』 (<https://kodomo5000.dialogue.or.jp/>) に、東京都石神井学園の子ども、聖園子供の家の子どもが参加しました。

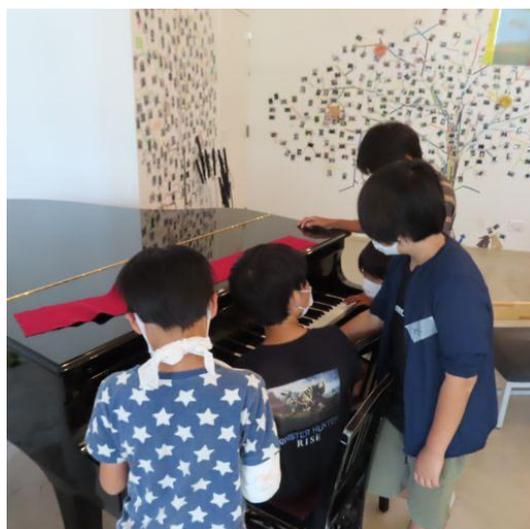
2022年8月16日（火）

聖園子供の家（神奈川県、藤沢市）から18人の小中学生と付き添い5人が体験

2022年8月20日（土）

東京都石神井学園（東京都、練馬区）から6人の小中学生と付き添い4人（うち2人は石神井学園退所者で、リトル・クリエイターズのボランティアを続けている青年）が体験

この場をかりて、この企画を実現するためにご協力くださったダイアログ・ダイバーシティミュージアム「対話の森」の皆様、関係者の皆様に、心から御礼申し上げます。



■体験内容

「ダイアログ・イン・ザ・ダーク」

真っ暗な中、白杖を持って行く道を探り、視覚以外で取り巻く世界に触れ、感じる体験。白杖を置いてボール遊びも行います。

「ダイアログ・イン・サイレンス」

ヘッドフォンをして音のない状態で、考えていることや気持ちを表現したり伝達をしたりします。手話も取り入れながら音の世界を飛び越える体験。

*COVID19が蔓延する中、十分な注意が払われ安心して体験ができるようになっていました。「ダイアログ・イン・ザ・ダーク」では、壁をつたい歩きし、またボール遊びをする際に手を使うことが不可欠ですが、真っ暗な中で手の消毒をする体験もありました。加えて、マスクをしたまま体験をしましたが「ダイアログ・イン・サイレンス」ではマスクによって表情が読み取れない苦勞も体験できました。

■子どもたちの声から

体験をした子どもたちのアンケート結果を以下に抜粋します。（漢字などママ）

「ダイアログ・イン・ザ・ダーク」を体験して

- まっくらでわかりにくかったけど おしえあってわかった。（小3）
- めがみえないひとが こんなかんじであるいたりしてたのがはじめてだった！！（小4）
- はくじょうのあつかいが難しかった。何も見えない人は見える人よりつらいことを知った。（小4）
- おにごっこのとき、どこがどこかわからなかった。くらいから、声もわかりづらかった。（小5）
- 目をあけてても おにごっこが むずかしかったです。しょうがいの人にはこんなに はくじょうを使って歩けるのがすごいなと思いました。（小5）
- めのまえが みえなくて こわかった。（小6）
- ちょっと不安になった。何も見えない。（小6）
- ふだんとは違う暗い場所に入って、心も暗くなった。（中略）不自由な人が思ったより多いこと（を初めて知った）。（小6）
- 何も見えないから自分がどこにいるか分からないこと。目が見えない人はこんなにまっ暗で住んでいるんだと思った。（中1）
- なによりも音が頼りの世界だから、無言になると誰がどこに居るか分からなくなった。でも逆に言うと、目でどこに居るか探る事ができない分、音で場所を探るから、普段は聞き逃してしまうような声などを聴けてよかった。（中2）



「ダイアログ・イン・サイレンス」を体験して

- きこえないせかいがたのしかった。(小2)
- なにがどうなっているのかがわからない。(小4)
- 音がない世界は伝える、理解するのが大変だなと思いました。(小4)
- (音のない場所に入って) かなしいなと思った。(中略) しゅわをはじめてしまった。(小6)
- コミュニケーション大事。(小6)
- 言葉が使えない分、体で伝えるしかない、だから恥ずかしがらずに大たんにやる事が必要だと思ったし、いつもより伝えようと努力する事ができた。(中2)
- こえをだしちゃだめなところ(が難しかった)。(中3)
- しゅわを覚えるのは私にとってはすごく頭の良い人じゃないとムリ。と私は思っていたけれど、伝えたいことを表現することによって相手にとどくことを初めてしまった。そして私たちと同じで私たちもしゃべることを小さいころにならったからきっとそれと同じなんだな。と思った。(中3)

光と音のある場所に戻った時、どう感じたか

- 光がある所は光なのにまぶしい!と思った。音がある所はいつもと同じ音なのにうるさい!と思いました。(小3)
- まわりがみえるおとがきこえるのとまわりがみえないおとがきこえないのはぜんぜんちがうなおもった。(小5)
- 光と音がある方が過ごしやすかった。(小5)
- 安心した。解放感があった。(小6)
- 目が痛い。変な感じがする。(中1)
- 逆に異世界にきたと思った。(中2)
- 世界と空気と見え方と聞き方が違った。やっぱり光は世界と見え方が違う。そして音では空気と聞き方が違った。これはいっぽう的に私の気持ちなので皆にとっては分からないかもしれないけど…(中3)

全体をとおして

- 目が見えなかったり耳が聞こえなかったりする人の苦勞(を初めて知った)。(小6)
- 今回の体験で思ったのは、自分は何かに頼りすぎているという事。
言葉が無くても意外と伝わる。
視えなくてもそこにある。
普段は目に入ってくる物、耳から聞こえる物が多過ぎて情報に犯されている。
今の僕は知りすぎてしまって逆にわからなくなったり、知っているからこそ知れない物があると気付いた。フラットな目線では、目が見えない、耳が聞こえない、を捉えることができないのだろう。
だから僕の知らない世界を知っていてそこで生きて、みんなと暮らしている、僕はそれがすごいと思っ
たし尊敬している。(中2)
- こういったことをじっさいやってみるとすごく大変で、これを毎日やるっていうのがすごいと思っ
た。そして、私たちとは少し違うけどほとんどはふつうの人と同じことをしているから、嬉しい!あ
と上手に教えてくださったり、暗やみの中でおしえてくださったりさんはすぐに皆の名前を覚えて
くれて嬉しかったです。あと耳が聞こえない方もしゅわを教えてくれたり、スポーツとか食べ物のえん
ぎがとても上手でびっくりしました。本当にアリガトウございました。(中3)